

SY1-1

乳幼児の歯や口の機能の発達とその支援について

田村 文誉

日本歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック

摂食機能の獲得には、口腔内の環境、特に歯の存在が重要です。乳歯はヒトの全身の中で、成長とともに唯一、乳歯から永久歯へと入れ替わる臓器です。前歯の役割は主にかじりとりこと、奥歯（臼歯）の役割は主にすり潰すことです。歯が萌出し、かみ合わせができてくることによって、食べられる食品も増えていきます。

新生児は口腔内に歯は萌出しておらず、上下のあごを閉じると前方部に、「顎間空隙」という乳首が入る程度の隙間がみられます。新生児期には哺乳反射（原始反射）である哺乳機能により栄養を摂取しますが、やがて大脳の発達に伴い哺乳反射は消失し、生後5,6ヵ月頃には随意運動で行われる摂食機能へ移行して、離乳食が開始されます。

乳歯の萌出は、生後7～8ヵ月頃に下の前歯から始まります。1歳前には咀嚼の基礎となるすりつぶし機能が獲得されます。1歳6ヵ月頃になると、上下の前歯と、臼歯も一部萌出しています。個人差はありますが、平均して12～16本の乳歯が萌出している状態です。栄養摂取は、離乳が完了し、幼児食を食べられるようになっていきます。

そして3歳頃には上下20本の乳歯のかみ合わせが完成し、自分で食べる機能も上手になっていきます。

一方、歯が萌出してくると、むし歯（う蝕）や歯肉炎にならないよう、口腔内を清潔にすることが大切になります。う蝕の原因となるミュータンス連鎖球菌は、1歳6ヵ月頃から歯に定着します。細菌は、食事の時に口移しをしたり、同じスプーンを使ったりするなどして、母親などの家族からうつります。一般的に、う蝕はまだ少ないのですが、多数の歯がう蝕になっていたり、重度のう蝕になっていたりすることもあります。このようなう蝕のハイリスクなお子さんの場合、哺乳瓶を長期に使用していたり、あるいは養育者からのネグレクトの可能性も考えられます。

子どもの口腔機能の発達を支援するうえでは、子どもを育てている養育者への支援が不可欠です。多職種と連携した歯科からの適切なかわりにより、子どもの口腔機能の発達を支援していくことが重要です。